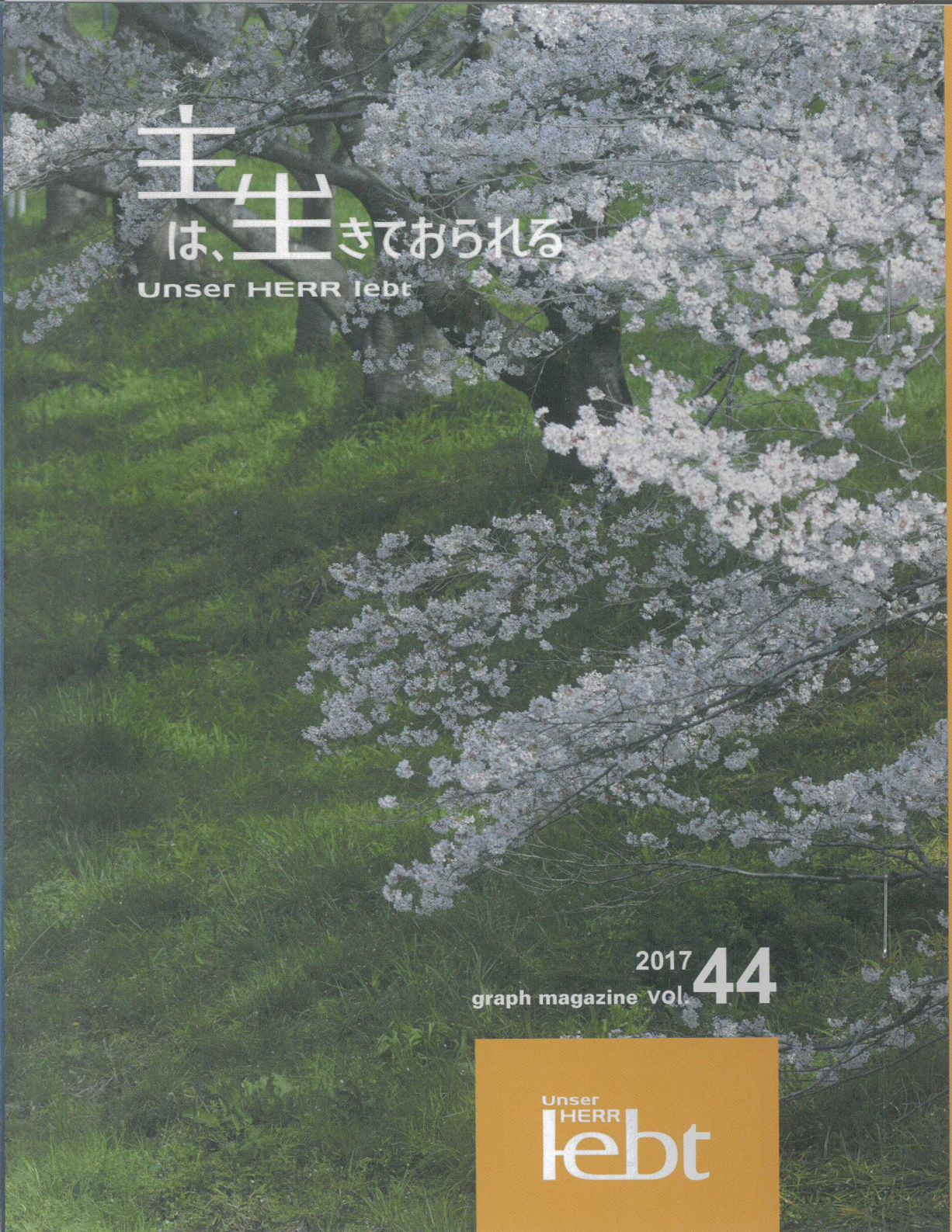


主は、生きておられる

Unser HERR lebt

2017 graph magazine vol.44

Unser HERR lebt

Unser HERR lebt

主は、生きておられる

まことに、まことに、あなたに告げます。
人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません。（ヨハネ3・3）

vol.44 定価100円（税込み）

Unser HERR lebt
主は生きておられる

メッセージ

4 使徒との別れ　近森大志郎

13 道であり、真理であり、いのちである方　黒田英文

ベック兄の祈りとミンヘン姉の証し

20 ゴットホルド・ベック兄の祈り

22 ミンヘン・ベック姉妹の証し

8人の証し

38 きょう、救いがこの家に来ました
人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです　高橋敬治

44 神は唯一です　高橋郁子

49 暗やみには光を　渡邊周作

59 光よあれ　重田洋

67 主の憐れみによって　重田さとみ

74 ただ感謝します　池田可代子

79 聖書はすべて神のみことば　小森良隆

86 神の国とその義とをまず第一に求めなさい　小森志保

使徒との別れ

近森 大志郎

パウロは、ミレトからエペソに使いを送って、教会の長老たちを呼んだ。彼らが集まって来たとき、パウロはこう言った。「皆さんは、私がアジヤに足を踏み入れた最初の日から、私がいつもどんなふうにあなたがたと過ごして来たか、よくご存じです。私は謙遜の限りを尽くし、涙をもって、またユダヤ人の陰謀によりわが身にふりかかる数々の試練の中で、主に仕えました。

皆さん。御国を宣べ伝えてあなたがたの中を巡回した私の顔を、あなたがたはもう二度と見ることがないことを、いま私は知っています。

あなたがた自身が知っているとおり、この両手は、私の必要のためにも、私とともにいる人たちのためにも、働いて来ました。このように労苦して弱い者を助けなければならないこと、また、主イエスご自身が、『受けるよりも与えるほうが幸いである。』と言われたみことばを思い出すべきことを、私は、万事につけ、あなたがたに示して来たのです。」こう言い終わって、パウロはひざまずき、みなの者とともに祈った。みなは声をあげて泣き、パウロの首を抱いて幾度も口づけし、彼が、「もう二度と私の顔を見ることがないでしょう。」と言ったことばによって、特に心を痛めた。それから、彼らはパウロを船まで見送った。（使徒　20・17～19、25、34～38）

二〇一六年八月二十三日、ゴットホルド・ベック兄は有毛細胞白血病、すなわちhairy cell leukemiaに合併した消化管出血によって、瞬時に天国へと上げられました。その後に御代田で行われた集会葬には全国各地から多くの方々が、久しぶりの方々も含めて参列されたことは、兄弟姉妹方も御存知のとおりです。この葬儀のメッセージで重田兄は使徒行伝の20章を引用されました。白血病・皮膚癌・糖尿病と闘いながら、イエス様の伝道に明け暮れたベック兄に接した多くの兄弟姉妹方も、使徒パウロとエペソ教会の長老たちとの別れを記したこの箇所を、ベック兄と集会の兄弟姉妹との別れの二重写しとして捉えられたのではないでしょうか。

ベック兄は二〇〇四年にhairy cell leukemiaを発症しましたが、特効薬クラドリビンによる第一回目の治療は劇的な効果を上げて、その年の秋のドイツ・キャンプにも出席されました。キャンプの前に、ドイツのお宅に家族四人で数日間お世話になりましたが、まったく健康体とも思える体調でした。しかしその時から、使徒行伝20章を開くたびに、パウロがエペソの長老たちと別れたように、いつの時かベック兄と集会の兄弟姉妹たちも別れの時が来るのではないか、と思わざるを得ませんでした。この使徒行伝20章17節から始まる『別れの章』をよく読んでみますと、四つのポイントがあることに気付かされます。すなわち、証し・別れ・警告・祈り、です。そこで今回は、それぞれの箇所について聖書から考えてみたいと思います。

1パウロの証し

パウロは新約聖書のいわゆる書簡集では、聖書の奥義について詳しく書き記しています。しかしながら、使徒行伝でルカは、パウロの行動について、第三者から見た目で客観的に淡々と記しています。この中で例外とも言える、パウロ自身の言葉による証しが三回だけ記載されています。その中の二回は、パウロがイエス様に出会って救われたことの証しであり、エルサレムの兵営の前とカイザリヤのアグリッパ王の前でパウロが証しています。

「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。とげのついた棒をけるのは、あなたにとって痛いことだ。」私が「主よ。あなたはどなたですか。」と言いますと、主がこう言われました。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。起き上がって、自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現われたのは、あなたが見たこと、また、これから後わたしがあなたに現われて示そうとすることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。」

（使徒　26・14～16）

そしてもう一つの証しが、主イエスによって救われたパウロが使徒として用いられた証しであり、使徒行伝20章18節以降に記されています。

皆さんは、私がアジヤに足を踏み入れた最初の日から、私がいつもどんなふうにあなたがたと過ごして来たか、よくご存じです。私は謙遜の限りを尽くし、涙をもって、またユダヤ人の陰謀によりわが身にふりかかる数々の試練の中で、主に仕えました。益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。人々の前でも、家々でも、あなたがたを教え、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰とをはっきりと主張したのです。

私はきょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。

このように労苦して弱い者を助けなければならないこと、また、主イエスご自身が、「受けるよりも与えるほうが幸いである。」と言われたみことばを思い出すべきことを、私は、万事につけ、あなたがたに示して来たのです。

（使徒　20・18～21、26～27、35）

ベック兄が約六十年前に伝道のために日本に遣わされてから、本当に多くの日本人が救われました。個人伝道に限れば、多分、ベック兄ほど多くの人々を救いに導いた人はいないのではないでしょうか。ベック兄に導かれた一人ひとりは、ベック兄に出会い、イエス様へと導かれ、救われたことについて、主なる神に感謝してもし過ぎることはありません。

また、ベック兄はその学びによって、みことばの全体を、また神のご計画の全体を、余すところなく私たちに知らせてくださいました。さらに、宣教師としての生きざまを集会の私たちに見せてくれました。確かに海外から多くの宣教師の方々が日本に来られますが、定年となれば本国に帰ります。しかしながら、宣教師として八十六歳の最期まで走り抜けられたベック兄は、将に、神の恵みの福音を証しする任務を果たし終えたと言えるでしょう。しかも、軽井沢に埋葬されることによって、日本の土となられたのです。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかし、もし死ねば、豊かな実を結びます。

（ヨハネ　12・24）

2使徒との別れ

ミレトにエペソの長老たちを呼び寄せたパウロは、主に仕える者としての働きについての証しに続いて、彼らとの別れについて話します。

皆さん。御国を宣べ伝えてあなたがたの中を巡回した私の顔を、あなたがたはもう二度と見ることがないことを、いま私は知っています。

こう言い終わって、パウロはひざまずき、みなの者とともに祈った。みなは声をあげて泣き、パウロの首を抱いて幾度も口づけし、彼が、「もう二度と私の顔を見ることがないでしょう。」と言ったことばによって、特に心を

痛めた。それから、彼らはパウロを船まで見送った。
（使徒　20・25、36～38）

パウロは聖霊の示しにより、エルサレムで囚人となって自由が奪われる結果として、もう二度とエペソの信者たちに会うことができなくなることが分かっていました。ですから、エペソの長老たちに別れの挨拶をしたのです。

一方、ベック兄は天に召される十日ほど前でも、イエス様との空中再臨への希望を持たれていました。ベック姉を初めとして、集会の兄弟姉妹と一緒に約束の地に入りたいと切に願っていたのです。ですから、ベック兄から私たちへの別れの挨拶はありませんでした。そして私たちも、ベック兄の首を抱いて、お別れの挨拶をすることはできませんでした。けれども私たちは、ベック兄の天国へのゴールインを目の当たりにすることによって、また、聖霊とみことばとの啓示によって、天国への確信をより強くされたのです。

3 教会および集会への警告

パウロは別れに際して、エペソを中心とした小アジアの教会に警告を発しています。それは、パウロ自身が宣べ伝えてきた福音の真理をねじ曲げようとする、誤った教えを広める勢力が侵入してくる、という警告です。

私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中にはいり込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。ですから、目をさましていなさい。
（使徒　20・29～31）

さらに、パウロが去ったエペソ教会で最晩年を過ごした使徒ヨハネも、この誤った教えを広めようとする勢力を、にせ預言者あるいは反キリストと呼んで、パウロの予言が現実となったことを示して警告しています。

愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい。イエスを告白しない霊はどれ一つとして神から出たものではありません。それは反キリストの霊です。あなたがたはそれが来ることを聞いていたのですが、今それが世に来ているのです。
（1ヨハネ　4・1～3）

イエス・キリストが成就された十字架の贖いの真理を、反キリストから守ることは非常に重要です。事実、イエス・キリストの昇天後二千年間続いているこの教会時代は、誤った教えとの戦いの連続であったともいえます。しかし、このように反キリストへの警戒心を強めていきますと、人間の性質として批判精神が強まり、逆に愛が後退するということになりかねません。

ヨハネの黙示録においても七つの教会の筆頭として、エペソの教会に次のみことばが送られています。

エペソにある教会の御使いに書き送れ。「右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。『わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。しかし、あなたには非難すべき

使徒との別れ

ことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。』」（黙示録　2・1～5）

エペソの信者たちはパウロとヨハネによる警告に忠実でした。そして、ニコライ派を代表とする反キリストを憎み対抗しました。しかしその結果として、また人間の性質として、聖霊によってエペソの教会に満たされていたキリストの愛から離れてしまったのです。このように、福音の真理を守り続けることと、お互いに愛し合うこととの両立は必ずしも容易ではありません。しかし、ベック兄の葬儀での親族の証しからも明らかなように、ベック兄はその生涯を通して、聖霊の導きによってこの両方を実践されたのです。

そこには、ギリシヤ人とユダヤ人、割礼の有無、未開人、スクテヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。キリストがすべてであり、すべてのうちにおられるのです。それゆえ、神に選ばれた者、聖なる、愛されている者として、あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださったように、あなたがたもそうしなさい。そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。（コロサイ　3・11～14）

4 使徒の祈り

使徒たちが召された後、教会には反キリストの攻撃がありましたが、そのことを予言した使徒たちは教会のために祈りました。今も御国から祈ってくれているのです。

あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。

ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあって御国を継がせることができるのです。（使徒　20・28、31～32）

ヘブル書の11章は「信仰の章」ともいわれており、遥か昔の旧約時代に、信仰によって偉人と称賛された人々の証しが記されています。そして、現代を生きる私たちもベック兄を通して、走るべき道のりを走り終え、イエス・キリストに対する信仰を守り通した信仰者の生涯を直接この目で見たのです。私たちも見習いたいと思います。しかし、ベック兄のようには速く走り抜けることはできないでしょう。ちょうどマラソンの先頭集団から遠く離れた最終ランナーのように！　けれども、遅くても、つまずき、よろめきながらでも、競技場に置かれているゴールを目指して、忍耐をもって走り続けたいと切に思います。

パウロは書簡集において信仰の歩みを競技にたとえました。ただし、実際の競技と信仰の歩みとには大きな相違点があります。長距離ランナーは孤独です。これに対して、信仰には聖霊の導きがあり、兄弟姉妹との交わりがあり、祈りがあります。ヘブル書の12章の冒頭に「このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから」とありますように、先にゴールインした信仰の証人たちが、雲のように私たちを取り巻いて祈ってくれているのです。そして今や、ひときわ大きな雲となって、ベック兄が集会

の私たち一人ひとりのために祈ってくれているのです。ですから、私たちも、目の前に置かれている競争を忍耐をもって走り続けようではありませんか！

そういうわけですから、愛する人たち、いつも従順であったように、私がいるときだけでなく、私のいない今はなおさら、恐れおののいて自分の救いを達成してください。神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行ないなさい。それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代の中にあって傷のない神の子どもとなり、いのちのことばをしっかり握って、彼らの間で世の光として輝くためです。そうすれば、私は、自分の努力したことがむだではなく、苦労したこともむだでなかったことを、キリストの日に誇ることができます。（ピリピ　2・12～16）



近森大志郎（吉祥寺キリスト集会）

道であり、真理であり、いのちである方

黒田 英文

わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。（ヨハネ　14・6）

はじめに

ヨハネ福音書には、「いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が、神を説き明かされた」（ヨハネ　1・18）と述べられており、そしてイエス様は、「だれも神を見た者はありません。ただ神から出た者、すなわち、この者だけが、父を見たのです。」（ヨハネ　6・46）と仰せになっておられます。

そこで、引用したみことばから、イエス様は、どのように神を説き明かされたのかについて、少しだけ考えたいと思います。

まず、大まかに言いますと、前半の「わたしが道です」というのは、全人類はアダム以来永遠の滅びに向かっているという旧約聖書の歴史を踏まえて、すべての人をお救いになるという父なる神のみこころを行うために、子なる神イエス様が、神でありながら人の姿をとって、この地上を歩んでいるという宣言です。「わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」というのは、このことを示したものです。

そして、後半の「わたしが…真理であり、いのちなので

道であり、真理であり、いのちである方

す」というのは、イエス様ご自身が「真理そのもの」、「いのちそのもの」という宣言です。「真理」と「いのち」は父なる神の本質を示すものですから、結局、イエス様は父なる神と「一つ」ですと宣言していることになります。

以下に、少し詳しく述べたいと思います。

一、わたしが「いのち」なのです

順序として、「いのち」から、聖書から見てまいりましょう。

1 まず、聖書の記述を見てみます。

創世記の冒頭には、「初めに、神が天と地を創造した。地は形がなく、何もなかった。やみが大いなる水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。そのとき、神が『光よ。あれ。』と仰せられた。すると光ができた。」(創世記 1・1〜3)とあります。

ヨハネの福音書の冒頭には、「初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。この方にいのちがあった。」(ヨハネ 1・1〜4)とあります。

2 そこで、イエス様はいつからおられたのかについてみますと、ヨハネ福音書の「ことば」とは、イエス様を指しています。そしてイエス様は初めから父なる神とともにおられ、イエス様ご自身も神であったとあります。

この点、イエス様は、「今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。」(ヨハネ 17・5)と祈られ、世界が存在する前から、子なる神として父なる神とともにおられたことを示しておられます。

3 次に、創造のみわざについてみますと、「すべてのもの」は、「この方によって造られた」、「造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない」とあり、また、「この方にいのちがあった」とありますから、造られた万物はイエス様によって、その「いのち」の力によって造られたと分かります。

この「いのち」の力は、万物を創造する根源的な力です。

4 ところで、この「いのち」は、イエス様が父から与えられたものです。このことについて、イエス様は、次のように示しておられます。

(1)「父がご自分のうちにいのちを持っておられるように、子にも、自分のうちにいのちを持つようにしてくださ」(ヨハネ 5・26)いました。

ここに、「父がご自分のうちに持っておられるいのち」は、万物創造の根源である「いのち」であり、イエス様に与えられた「いのち」も同じものです。

また、父は永遠の存在ですから、「父がご自分のうちに持っておられるいのち」は、永遠のいのちです。

(2)「父が死人を生かし、いのちをお与えになるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。」(ヨハネ 5・21)

ここに、「父が死人を生かし」とは、父は、生物としての死人に対してもいのち与え生かすことができることを指摘しておられます。

これに対し、イエス様が「与えたいと思う者」にいのちを与えるというのは、イエス様は、霊的には死んでいるけれどもみこころにかなっている者に対しては、その選びによって、霊的ないのちすなわち永遠のいのちを与えると仰せなのです。

5 さて、「造られたもの」とは何かについてみますと、聖書は、光、太陽、月、星、地球、その形状としての山、川、海、そこに生きる動物も、植物もすべてのものが含まれます。パウロは、「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められる」

道であり、真理であり、いのちである方

二、わたしが「真理」なのです

1 イエス様が「わたしが真理なのです」と仰せられたときの「真理」という言葉は、「神そのもの」、「神それ自体」という意味です。「神そのもの」、「神それ自体」というのは、神の真実、神のみこころ、神の行われることなどのニュアンスを含んで最も広い意味です。

そして、イエス様がどのようなお方であるかということは、人間の計りうるものではなく、人の言葉で書き表すことのできないものです。

2 真理がどのような内容のものかは、イエス様を受け入れた者に与えられる真理の御霊によって明らかにされます。

イエス様は次のようにお語りになりました。

①「わたしが父のもとから遣わす助け主、すなわち父から出る真理の御霊が来るとき、その御霊がわたしについてあかしします。」(ヨハネ 15・26)

②「その方は、真理の御霊です。世はその方を受け入れることができません。世はその方を見もせず、知りもしないからです。しかし、あなたがたはその方を知っています。その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちにおられるからです。」(ヨハネ 14・17)

③「しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導き入れます。御霊は自分から語るのではなく、聞くままを話し、また、やがて起ころうとしていることをあなたがたに示すからです。」(ヨハネ 16・13)

3 真理はあなたがたを自由にします。

イエス様は、その信じたユダヤ人たちに言われました。「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたはほんとうにわたしの弟子です。そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」(ヨハネ 8・31〜32)

ここでは、イエス様を受入れると、神のみこころにより、すべての束縛からその者を解放するという意味です。

4 真理の御霊を与えられていない者は、真理を理解することができません。

イエス様は、ピラトに「わたしは、真理のあかしをするために生まれ、このことのために世に来たのです。」(ヨハネ 18・37)と仰せられましたが、真理の御霊を与えられていないピラトは、「真理とは何ですか。」(ヨハネ 18・38)としか言えませんでした。

5 真理という言葉には、真理でないもの、すなわち、偽物、悪魔、偶像などに対して、これを強く排除し排斥する意味が込められています。

聖書には次の例があります。

(1)偽り者、偽りの父

イエス様は、アブラハムの子孫であるユダヤ人に対して、「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言

道であり、真理であり、いのちである方

(ローマ 1・20)と述べております。

6 また、人の創造については、創世記に「そして神は、『われわれに似るように、われわれのかたちに、人を造ろう。…』と仰せられた。」(創世記 1・26)と記述されています。

ここに「われわれ」とされているのは、父なる神、子なる神を指すとみてよいでしょう。これに聖霊を加える考えもあるかもしれません。

「われわれのかたち」のうち「かたち」は、形状をさすのではなく、イメージか、むしろ神と霊的に交流することを可能とする器官又は機能の意味と考えるのがよいと思います。

7 なお、箴言8章22〜31節には、神の創造のみわざの初めから、神のかたわらで、組み立てる者がいたとする記述があります。

うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」(ヨハネ 8・44)と強く非難しました。

これは、ユダヤ人が、その父と同様に、真理に立っていないからです。

(2)聖別

イエス様は、イエス様が父から遣わされたことを信じた者のために、「真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。」(ヨハネ 17・17)と祈られ、また、「わたしは、彼らのため、わたし自身を聖め別ちます。彼ら自身も真理によって聖め別たれるためです。」(ヨハネ 17・19)と祈られました。

これは、神の真理のうちにある信じた者を、悪い者から守っていただくためでした。

(3)唯一神

旧約聖書の神は、唯一の神であり、それゆえ、偶像礼拝の禁止を厳しく命じられております(出エジプト 20・3～4)。これも、神の真理の内容であると理解されます。

三、わたしが「道」なのです

1 父と子は「一つ」

子なる神イエス様は、人の姿をとって地上を歩んでくださいましたが、父なる神と「一つ」でした。

聖書に次のように書かれています。

①「子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行なうのです。」(ヨハネ 5・19)

②「わたしを見た者は、父を見たのです。」(ヨハネ 14・9)

③「わたしがあなたがたに言うことばは、わたしが自分から話しているのではありません。わたしのうちにおられる父が、ご自分のわざをしておられるのです。」(ヨハネ 14・10)

④「わたしのものはみなあなたのもの、あなたのものはわたしのものです。」(ヨハネ 17・10)

2 道

このように父と「一つ」であるイエス様が、「わたしが道であり、…わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」と仰せになられたみこころは、被造物なる人は、長い間神を拒み続けてきたので、この終わりの世に、神であるイエス様が人の姿をとって地上を歩み、様々な奇跡のわざやみことばを持ってご自身が神であることを啓示しているので、このようなイエス様を通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありえないということを、敢えて示されたものと思われます。

本当に感謝です。

3 時至ってなされたあかし

パウロは、このことを次のように示しております。

神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。これが時至ってなされたあかしなのです。(1テモテ 2・5～6)

終りに

イエス様がどのようなお方であるのかをこのような形で啓示してくださいましたこと、またこの文を記すことができましたことを感謝いたします。



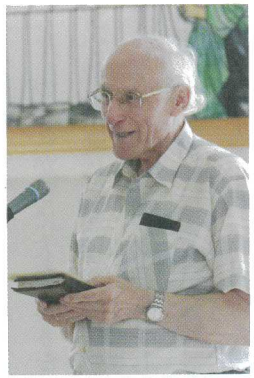
黒田英文(町田キリスト集会)

道であり、真理であり、いのちである方

ゴットホルド・ベック兄の祈り

主イエス様、私は今日、新たに自分自身をあなたにお捧げいたします。
御手の中にある器として私をお用いになってください。
あなた様だけが栄光をお受けになりますように。私を守ってください。
罪を犯さないように、あなたを悲しませないように。
御霊の言うことに対して絶えず聞く耳を持つように。
何があってもあなたと共に歩みたいのです。
そうでないと、まったく前進することができませんから。
今日もまた、あなた様が盛んになり、私は衰えるべきです。
私にではなく、あなた様の御名にのみ栄光が帰されますように。
自分のためには何も欲しがらないように、お助けください。
すべてのことを祈りの課題とする恵みをお与えください。
私は、自分の悟りに頼ることを恐れ、心配しています。
目に見えるこの世界が私にとって魅力のないものになり、
人に褒められても、誤解され批判されても構わないという心構えを持つことができますように。
あなた様だけを喜ばせたいという願いをひたすら持つことができるように。

あらゆる悪口から私を守ってください。
私の話す言葉が人々の励ましとなり、勇気を与えるものになるように。
どうか悩んでいる人々のところに私を導いてください。
あなた様のように、罪人の友となりますように。
失われている人々のために憐れみの涙を流す者になり、
無関心さから解放してください。
与えられている金銭も自分ではなく、
あなた様の導きに従うことができますように。
聖霊の宮であるという事実を絶えず覚え、
この事実を自覚することによって自分自身が根本から変えられますように。
今日が、あなた様の再臨の日となりますように。
あなたの御顔を拝し、御前にひれ伏すことこそ、心からの望みです。
この幸いなる希望によって、私があらゆる束縛から解放されますように。
もうちょっと、もしかすると今日、
私はあなたと一緒になることを待ち望んでいます。





ベックさんとミンヘンさんの結婚式／川崎市中野島

ミンヘン・ベック姉妹の証し



中央がベック姉妹

私は八十七歳になりました。これまでの全生活を簡単にまとめるのは非常に難しいと思います。

私の親は主イエス様を信じた者でした。しかし私は、ヒットラーの時代に大きくなったので戦争の影響を強く受けるようになりました。戦争中、敵の飛行機は、だんだんたくさん爆弾を落とすようになり、安全な所はなくなり、仕方なく、毎晩自宅の地下室で寝るようになりました。私はシュトゥットガルトの南の方、ある山の下に住んでいました。私の家の隣には役場があり、大きな丸い広場がありました。ある日、山の上から敵の飛行機が近づいてきました。おそらく役場の上に爆弾を落とそうと思っていたのでしょう。私は飛行機がこちらに降下してくるのを見て、走って地下室に逃げようとしました。丸い窓から爆弾が反対側の家に落ち、ゴーっというものすごい音とともに大爆発するのが見えましたが、私は無事に地下室まで行きました。もしそれが一秒でも前だったなら、私は間違いなく死んだのです。そのときのことが私に大変大きな影響を与えました。わずか数秒の差で、私は確実に死んでいたのです。爆弾にもいろいろな種類がありましたが、そのときの爆弾は簡単なものではなく、強い破壊力を持ったものでした。このことによって、私の人生観が根本的に変わったのです。私は主イエスを自分の救い主として体験することができるようになりました。奇跡でした。私は、もし今爆弾に当たったなら地獄へ行きます、ということがよく分かりました。

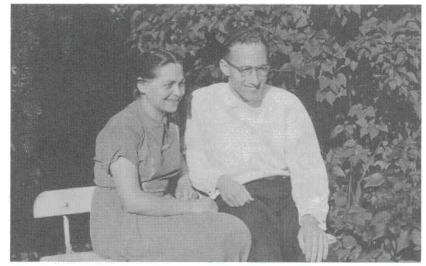
主人も同じようなことを経験しました。主人は、シュトゥットガルトの北の方に住んでいました。いつも二人のおじいさんたちと、自分の家の屋上から、爆弾がどこに落ちたかを見ていました。長い形をした焼夷弾（しょういだん）は、道に置いておけばまったく危なくなかったのです。しかし強い爆弾はあたり全部を破壊してしまうものでした。戦争から戻ったお父さんが、ここは危な過ぎる、と家族をお母さんの田舎に連れていきました。そこは敵の飛行機が来ることのない、のどかな田舎でした。田舎に移ってすぐ、シュトゥットガルトの彼の自宅に爆弾が落ち、あの二人のおじいさんは、いつものように様子を見に屋上へ行って亡くなったそうです。ですから、主人も私も、二人とも同じような守りを経験したのです。それは戦争が終わる直前のことでした。私たちの町にはそれぞれ一回、大きな爆弾が落ちました。私の町では私の自宅の反対側の家に、主人の町では主人の自宅に、その爆弾は落ちたのでした。

戦争が終わって、一～二週間くらい続くバイブルキャンプがルッツンベルクで開かれました。妹（エミリエ姉妹）はそのキャンプに行きたいと言いました。ドイツではすべてが壊され、まだ何の交通手段もありませんでしたが、ケースバッハの我が家には二台の自転車がありましたので、十五キロほど離れたそのキャンプまで妹は自転車で行きました。私は国が作った寮制の専門学校に入っていました。親戚が探してくれた所で、一年間そこで学ばなくてはなりませんでした。生まれて初めて親元を離れたので、私は寂しくなりました。先に救われた妹は、「私の所まで来なさい。日曜日は集会ですから、いらっしゃい」と私を誘いました。私は本当に行きたくなかったけれど、不思議なことに行きたい気持ちになっ

て、集会に行きました。妹に会うために私も自転車で、十五キロほど離れたその場所へ行きました。その日の集会でアイドリンゲンのシスターがしたメッセージが私の心の中にすごく入ってきました。自転車で寮の部屋に戻ると、その夜、初めて祈りました。

「イエス様、私のような人が救われることができるならば、お願いします。助けてください」。その夜はそのまま眠りましたが、夜中の十二時ごろ目が覚め、すごい平安と力を私は経験しました。それが救いということだと、はっきり分かりました。そして「これから毎週日曜日、集会に行きます」と私は決心しました。

寮として使われていた家の一階に、私は家主さんたちと共に住んでいましたが、その二階には別の家族が住んでおり、食事のときはいつも一緒でした。その家族の中に、手伝いをしている若い青年がいました。そのころは戦争が終わって間もなく、仕事がなく、学校もないときでした。私は、この人は誰でしょう?と思いましたが、自分の救いのことで心が支配されていましたから、男の子には興味はありませんでした。その青年が、主人でした。疎開したお母さんの田舎、というのがそこだったのです。私たちがまだ十五～十六歳のときでした。



日曜日には私は決まってルッツンベルクにある集会にメッセージを聞くために出かけて行きました。そこではアイドリンゲンのシスターがメッセージをしていました。寮では朝昼晩、毎回食事のとき、彼と顔を合わせました。家主さんの奥さんと二階のおばあさんは、うまくいっていなかったので、奥さんは私に「二階の人たちと話さないでください」と言いました。私は、おかしいと思いましたが、「そうなのですか?」と言う以外、何も言いませんでした。あるとき、彼は私に「あなたは日曜日にどこに行きますか?」と聞いてきました。私は救われてまだ一～二週間のときだったので、なんて言ったらよいか分からない、と思いながら、「私は聖書研究会に行きます」と答えました。それを聞いたら、彼はきっと、もういい、と思うだろうと思っていましたが、「そうですか。僕も一緒に行ってもいいですか?」と彼は続けて言いました。私は少し心の戦いがありました。「今私はもう救われました。罪はおかしたくないです」。それに、もし家主の奥さんが許さなければ、二階の家族と親しくなることは問題です。一度、誰からも見えない所で、彼は「どうしますか?」と聞きましたので、私は、「自転車が一つあります。一つの自転車で行くことができれば一緒に行かれます。私は後ろに乗りますよ」と言いました。彼は、下の人が見えないように私より先に歩いて、見えない所まで来た所で一緒に自転車に乗りました。そのようにして二～三回一緒に集会へ行きました。その三回目のときだったと思いますが、彼が救われました。そのときから、私たちは毎週日曜日に二人で集会に行くようになりました。下の人に見えないよう、いつも彼は私より先に歩いて途中から一緒に行きましたが、間もなく下の人にもそのことが分かるようになりました。しかし、家主の奥さんは、そのことに対して何も言いませんでした。

一年後、地方の大きなお城が国立の学校になりました。主人は、今のままここで手伝いを続けるのか、今後どうしたらよいか分からない状態だったので、彼のお母さんが、「一度試験を受けてみてください」と彼の背中を押しました。試験に合格し、彼はその学校に入学しました。そこは五十キロくらい離れた所にあり、学校の先生になるための専門学校でした。

いつか必ず結婚する、と二人とも決めました。しかし、私たちの霊的面倒を見てくれていた集会のルデヤ姉妹は、「あなた方はまだそんなに若いのだから、今はまだ離れていた方がいいんじゃないですか?二人はシベリアに、

ミンヘン・ベック姉妹の証し

一人はアメリカにいても主は必ず導きます」と私に言いました。私はそれを主人に言いました。そのときの主人はいつもの主人ではなく、「それは従えません」と言いました。私は平安がちょっとなくなりました。「やっぱり従いましょう」となり、彼は学校へ行き、私は寮生活を終え、シュトゥットガルトに戻りました。それ以来、三年以上の間、お互いにまったく会いませんでした。手紙も書かず、連絡を一切取らなかったのです。

アイドリンゲンの集会は、毎年お正月に、シュトゥットガルトの大きな場所を借りて集会を行います。そこで、主人と私は偶然再会しました。あれから三〜四年が経っていました。二人とも守られていました。手紙を書きましょう、と二人は再びコンタクトを取るようになりました。

彼は救われたころ、宣教師か牧師になろうと思っていましたが、三年間の学校生活の中で、先生になってもイエス様のために何か役に立つかもしれない、と思うようになり、思いが揺れたそうです。そのころ、スイスのベアテンベルクで、Dr.マソツークというユダヤ人夫妻が建物を購入し、神学校を始めました。そこはヨーロッパで一番聖書的でよい、と評判になりました。主人はその学校にどうしても行きたいと思うようになったのですが、その学校では、三年間の在学中に女の子と付き合うと退学させられる、と聞き、確かに一人退学させられた人がいることが分かってから、怖くなりました。シュトゥットガルトの大きな集会にいる間に、彼はDr.マソツークに会い、言いました。「僕はあなたの開いた神学校に行きたいのですが、結婚を約束した人がいます」。彼は、もしそのことに反対されたら、神学校には行かない覚悟で聞きました。Dr.マソツークは「そういうことならOKです。けれども、手紙を書いてよいのは日曜日だけです」と言いました。「はい」と主人は約束しました。主人はそれからスイスまで行き、三年間その神学校で勉強する間、日曜日にだけ手紙を書きました。

私はアイドリンゲンで開かれた専門学校へ行き、家

事全般を一年間学びました。私の母が、どうしてもそこに行って欲しい、と願ってのことでした。それはすごくよい訓練でした。その後、シュトゥットガルトの専門学校で毎日、洋裁を学びました。

日本で宣教活動をしていたある宣教師が、日本からスイスのベアテンベルクの神学校に来て、学生たちに話しをしました。日本語を勉強するためには、聖書に書かれている最も長く生きた人メトシェラの九百六十九年、ソロモンの知恵、そしてヨブの忍耐、この三つのことが必要です、と。これを聞いた主人は、「日本での宣教は私には向いていない」と思い、一年間心の中で戦いました。日本に行けば、日本語を覚えなくてはならない、しかし、そんなに難しい言葉では・・、と思ったのです。主人は言語を学ぶことをそれほど得意としていませんでした。日本から来たその宣教師は、「ここにいる皆さんは、いつかは世界のどこかへ行って宣教をすることになります。どなたか日本に行きたい人は?」と聞かれ、何人かの学生が手を挙げたそうですが、主人は手を挙げませんでした。はっきりとした確信を持たないと日本まで行かれない、と思ったからでした。その後、長い間祈りました。けれども平安にならなかったのです。しかし、日本に行くことに決めたときは、大きな喜びが湧くようになったそうです。先の宣教師が、「日本では天皇陛下が、『私は神様ではない』と公に言いましたので、今すごく開いています。日本の人は求めていますから、今一番宣教師が必要な国です」と話すのを聞いて、そのとき、彼は決心したのだと思います。そのときは、聖霊がすごく働きました。主人から私はその話を聞きました。私の中に反対する思いはまったくありませんでした。私たちは結婚することに決めていました。私は一緒に行くのです。どこに行くかは彼が決めなくてはなりません。彼が行きたければ、私もそこに行かなければなりません。

アイドリンゲンの一人のシスターが、宣教師として南ア

ミンヘン・ベック姉妹の証し

フリカに行く前に、英語を学ぶためにイギリスに行くことになりました。そこで、「そのシスターがアフリカへ行ったら、その代わりにあなたがアイドリンゲンを通してイギリスで英語を勉強するのはどうですか?」と提案され、私は、これは導きと思い、英語の上達のためにイギリスへ一年間行くことになりました。というのは、もし日本に行くならば、日本語を学ぶ必要があり、そのためには英語を通して勉強するしか方法がなかったのです。ドイツ語で日本語を勉強する本がなかったからです。そのため、英語がどうしても上手にならなければなりませんでした。学校の英語だけでは十分ではありませんでした。

私はイギリスがすごく好きでした。本当に好きでした。アイドリンゲンを通してオークという、ロンドンにある集会に行くようになりました。そこはオースチン・スパークスの集会でした。その集会はブレザレンの集会で、今の私たちの集会とまったく同じでした。牧師はおらず、兄弟たちが責任を持っています。そこに一年行きました。五千人位が集う、とても大きな集会でした。Mr.スパークスは毎年一回、大きな集会を開催し、そこには全国から信者や責任者が集まってきました。そしてMr.スパークスがメインスピーカーを務めました。Mr.スパークスはすごく頭のよい人でしたから、メッセージもとても深いものでした。

私はイギリスでは働かなくてはなりませんでした。当時外国へ行くとき、二十マルクしか持ち出すことができなかったので、私はある病院で看護師としての仕事を見つけ、その寮に住んでいました。とてもよい場所にありました。日曜日と、木曜日の夜の集会にも電車に長い時間乗って行きました。あるとき、アイドリンゲンの学校の先生がロンドンに来て、オークの集会所にしばらく滞在しました。ドイツ人の彼女とは集会が終わってからいつも一緒に話しました。

その週は「イエス・キリストの体」についてのメッセージが続いていました。先生はそこで話されたすべてのメッセージを聞くことができました。仕事のため平日の道の上で先生からその話を聞きました。彼女は古くからの信者でしたが、聞いたばかりの新しい知識を全部私に話してくれました。彼女は喜びに満ち溢れていました。そして私はそのメッセージをすごくよく理解しました。とても不思議なことでした。彼女から聞いたことを全部受け取りました。体中で吸収しているようでした。内容は次のことでした。

大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。

（ローマ　12・5）

organism（主のみからだなる教会）とorganization（組織としての教会）の違いなのです。一人ひとりの器官が集まって、生きているキリストの体、これがorganismであり、organizationは、人間が作った組織です。この区別が分かれば、全部分かります。

パンは一つですから、私たちは、多数であっても、一つのからだです。それは、みなの者がともに一つのパンを食べるからです。

（1コリント　10・17）

ですから、ちょうど、からだが一つでも、それに多くの部分があり、からだの部分はたとい多くあっても、その全部が一つのからだであるように、キリストもそれと同様です。なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。

確かに、からだはただ一つの器官ではなく、多くの器官から成っています。たとい、足が、「私は手ではないか

ミンヘン・ベック姉妹の証し

ら、からだに属さない。」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。たとい、耳が、「私は目ではないから、からだに属さない。」と言ったところで、そんなことでからだに属さなくなるわけではありません。もし、からだ全体が目であったら、どこで聞くのでしょう。もし、からだ全体が聞くところであったら、どこでかぐのでしょう。

しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。もし、全部がただ一つの器官であったら、からだはいったいどこにあるのでしょう。しかしこういうわけで、器官は多くありますが、からだは一つなのです。そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うこともできません。

それどころか、からだの中で比較的に弱いと見られる器官が、かえってなくてはならないものなのです。また、私たちは、からだの中で比較的に尊くないとみなす器官を、ことさらに尊びます。こうして、私たちの見ばえのしない器官は、ことさらに良いかっこうになりますが、かっこうの良い器官にはその必要がありません。しかし神は、劣ったところをことさらに尊んで、からだをこのように調和させてくださったのです。

それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶのです。あなたがたはキリストのからだであって、ひとりひとりは各器官なのです。

（1コリント　12・12～27）

教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

（エペソ　1・23）

また、両者を一つのからだとして、十字架によって神と和解させるためなのです。敵意は十字架によって葬り去られました。

（エペソ　2・16）

からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。

（エペソ　4・4）

それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、・・・キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。（エペソ　4・12、16）

なぜなら、キリストは教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。

（エペソ　5・23）

私たちはキリストのからだの部分だからです。

（エペソ　5・30）

また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。

（コロサイ　1・18）

ですから、私は、あなたがたのために受ける苦しみを喜びとしています。そして、キリストのからだのために、私の身をもって、キリストの苦しみの欠けたところを満たしているのです。キリストのからだとは、教会のことです。

（コロサイ　1・24）

かしらに堅く結びつくことをしません。このかしらが

ミンヘン・ベック姉妹の証し

もとになり、からだ全体は、関節と筋によって養われ、結び合わされて、神によって成長させられるのです。

（コロサイ　2・19）

キリストの平和が、あなたがたの心を支配するようにしなさい。そのためにこそあなたがたも召されて一体となったのです。また、感謝の心を持つ人になりなさい。

（コロサイ　3・15）

イエス・キリストのからだと私たちとの関係は、いのちの関係です。一つのorganismとイエス様との関係です。こういうメッセージはそれまで聞いたことがなかったのです。ふつうの教会はorganizationです。「イエス・キリストのからだ」と私の関係、が大切になりました。

私はすぐにゴットホルドに手紙を書きました。メッセージの内容でいっぱいの長い手紙になりました。「私たちが将来日本に行くときは、これをメッセージしなければならない」と一生懸命に書きました。ところが彼から来た返事は「はい、はい、はい、そうでしょう」で、反対はしなかったけれども、彼はピンと来ていなかったのです。私が何を伝えようとしているのか、まだ分かっていないと私は感じました。

ある日曜日にオークの集会で洗礼式があることが分かり、私はすぐ申し込みました。けれども、赤ちゃんのときに滴礼を受けていましたので、二回洗礼を受けることはよいのだろうか、と心の中で葛藤が起こりました。でも、やはり受けよう、と申し込みました。その土曜日、ゴットホルドがロンドンのオークまで来ました。私の洗礼式のことなどまったく知らずに来ました。彼はオークで宿泊でき、それはとてもよかったのです。日曜日、私は集会へ行き、彼と会いました。私は言いました。「ゴットホルド、この大切なことが分からなければ、私はあなたと結婚することができません」。彼は

困っていました。「一度、Mr.スパークスと私たちの問題を話してください」と私が言うと、彼はMr.スパークスと話しに行きました。そしてMr.スパークスが答えとして言ったことは、こうでした。「あなたがたは、一緒に日本まで行きなさい。そうすれば問題は解決する」。それを聞いて私は安心しました。Mr.スパークスはすごく尊敬する方で無駄な話しをしない方でしたので、そのような方が言われると、主はそういうことができる、と思いました。

その後、スイスの神学校で主人はドイツから来る学生の世話をしたりしていましたが、Dr.マソツークがフランスで神学校を開くことを決め、主人を責任者にするつもりでしたが、主人は考えて、それは断りました。「やはり、日本まで行かなくてはならない」と言って。

その後、私たちがドイツに帰ると、主人は宣教団体に入りましたが私は賛成しませんでした。団体に入りたくない、と。でも主は私たちを必ず導く、と思うその信仰で、仕方がない、と思うことにしました。主人は日本まで船で旅することになりました。私は、アイドリンゲンで一年間、宣教師の妻として派遣されるのを待っていました。Mr.スパークスは、ウォッチマン・ニーの集会「リトル・フロック（小さな群れ）」とコンタクトを持っていましたので、オークに主人が滞在したとき、コロンボ、シンガポール、マニラ、香港など、港のある町の集会の連絡先をすべて教えてくれていました。船は貨物船でしたので安く行くことができ、宣教師がいつも使っていました。各港に着くと、荷下ろしのために約三日間停船します。必ずその間主人は「リトル・フロック」の集会の人たちと会いました。日本到着前、最後の港である香港では、ウォッチマン・ニーの一番親しい友だちと一日過ごしました。山の上に行って、そのテーマ「イエス・キリストの体」についてだけ話したのです。そしてそのとき、彼はピンと来ました。彼は心の目で見えました。そして彼から来た手紙には、本当にいっぱいのこ

ミンヘン・ベック姉妹の証し

とが書かれていました。そのとき、私は思いました。「私は黙ります。彼はもう全部分かっていますから、彼に任せます」。彼は完全に分かっていました。私たちはそのように働かなくてはならない、と。

横浜の港に着くと、宣教団体の責任者の夫婦が迎えにきてくれました。川崎市中野島にあるご自宅に着くとすぐにゴットホルドはお二人に「この方法で私は働きます」と話したそうです。けれどもお二人にはよく分からなかった、ピンと来なかったようでした。



日本での宣教が始まりました。ドイツでは宣教団体の牧師が、主人を大変よく守ってくれました。「皆がそのように決めても、ベックさんは皆とは違う方向に行ってもよい」という態度を取っていました。約九年間、彼は私たちをすごくよく守ってくれました。しかし彼が亡くなられた後に牧師になられた方は正反対の方でした。団体として、皆同じでなくてはいけない、となり、私たちはその団体から離れることにしました。その牧師さんは、日本まで私たちに会いにきて一緒に話しましたが、私たちは、もう団体にいることは終わりにしよう、とはっきり団体を離れる決心をしました。主人がお父さんに電話でそのことを伝えると、お父さんは怒っていましたが、お母さんは、「ゴットホルドは間違ったことはしない」と言いました。また、私の父は全然反対せず、「ゴットホルドは必ず宣教団体から離れると分かっていた」とだけ、当然のように言いました。問題は、私たちは宣教団体からお金をもらうことがなくなったことでした。主人のお父さんが宣教団体を作って、今ではドイツで一番大きな団体となっていますが、そこからお金が来ましたが、私たちはそこからも離れました。「主がすべてを備えてくださいます。それを教えますし、信じます。それなのに、どうして実際的なお金をお父さんの宣教団体からもらえますか?」私たちは決まったお金が入らない、ですから信仰によって主に頼らなければならない、それは本物だ、と思ったのです。そしてそれは今まで失敗しなかったのです。お金がないと、かえって迷うこともなくてよかったのでした。主に頼ることは一番大切な、そして必要なことです。それが分かってから、すべての人間的な助けは切りました。主は素晴らしいです。その方法を通して主を初めて知ることができるようになります。自分で儲ければ、主に頼らなくてもいいでしょう。素晴らしい道です。私たちは後悔していません。

当時、六年に一度、ドイツに帰っていましたが、そのころドイツに帰ると、ドイツの集会を知るようになりました。ドイツの南の方は集会が少ないのですが、北の方は集会が多くあります。子どもたちがまだ小さかったので、私は子どもたちの世話で行かなかったのですが、主人が三つの集会に行き、話をしました。すると三つの集会が、「私たちはあなたがたの後ろに立ちます。あなたがたのために祈ります。毎月一回献金して、それをあなたがたに送ります」と言ってくれました。私たちは、その献金がどのくらいになるか分からなかったけれど、すごく喜びました。なぜなら、私たちは信仰によって本当に生きることができるからでした。現在その中の一つの集会は、自分の集会所を建てているので、献金を送ることができない、という手紙がきましたが、他の二つの集会は今でも私たちのために祈り、月に一回献金をしてくれています。それなので、私たちの生活のために、日本の集会で集まった献金からは一円ももらう必要なく今日まできています。

うちの子どもたちはドイツ人学校へ行きましたが、それも問題でした。なぜなら那珂湊に住んでいましたが、ドイツ人学校は東京にあったのです。宣教師の子ども

ミンヘン・ベック姉妹の証し

たちの寮もありましたが、我が家は五人子どもがいたので、経済的に問題でした。けれども、主がすごく私たちに備えてくださいました。まったく誰にも頼まないで、主が導かれたのです。ある日、東京に住むブレザレンの宣教師が、ベックさんはブレザレンのように働きたいと聞いて連絡をくれ、次のように話しました。「古い家があります。以前住んでいた宣教師が病気になって帰らなければなりませんでした。すごくボロい家ですが、もし住みたいなら、ただで住むことができます」。主人はすぐ東京まで行き、古い家を見てきて言いました。「大変です。大変古い家です」。それを聞いて私は言いました。「大変じゃないです。私たちは掃除するし、部分的に直すこともできます。大丈夫、大丈夫。全然問題ないです」。それが、今住んでいるこの吉祥寺の場所でした。この家に私たちはお金を払わなくてよい、という条件でしたから、何でもいい！何でもいい！と思っていました。けれども、そんなにひどくはなかったです。それから何年か経って、この土地を買うことができました。かなり高い金額でした。

そのころの六年に一度のドイツ帰国は、子どもが五人の大家族でしたから、安い方法、ロシア経由で帰りました。ハバロフスクまで船で行き、モスクワまで行き、モスクワからウィーンまで、ウィーンからシュトゥットガルトまで、とシベリア鉄道と飛行機を乗り継ぎました。子どもたちは皆小さかったけれど、守られました。守られたことが本当によく分かりました。私たちは一週間くらいかかったその旅行に、サラミと、そのような食べ物だけ持っていきました。奇跡だらけでした。主が道を開いてくださいました。

吉祥寺の古い家を壊して建て直すことになりました。このころからいろいろな人が救われて集うようになっていました。また、御代田にも行く場所が与えられました。これまでいろいろな所に行くことがありましたが、いつも信仰と信頼が必要でした。そしてすべてがすごくよくなりました。吉祥寺のこの家を建てるときも、御代田の建物を建てるときも、いつも必要なときに間に合うようにお金が入りました。しかも、その金額は、ちょっとだけのものではありませんでした。ですから、私たちは勇気を持って進めました。あるとき、この吉祥寺の隣の土地が売りに出される、ということを聞きました。今までの土地よりも広い土地です。主人はすぐ、「私たちが買います」と言って、問題なく購入することができました。集会に集う人が多くなり、集まった献金があったのです。すごいことでした。イエス様が生きておられ、導いておられる、ということをよく経験しました。

宣教団体に入って過ごした、最初の九年間は、主によってだけ導かれる、ということを本当に祈りました。宣教団体の牧師が本当に主人を守りましたので、団体から離れるチャンスを得ることはなかなか難しいことでした。しかし、その次の人が来たことは、結果的にはすごくよかったのです。そのことで、私たちは団体を離れました。反対していたベックお父さんは、後になってそれが分かるようになりました。私の妹がよくベック家に行きました。そしてだんだんと、お父さんもそのことを理解することができるようになった、と聞きました。死ぬ前にお父さんと会うことはなかったのですが、おそらく、イエス様はそのことを解決した、と思っています。

現在、日本では四十五箇所、北海道から沖縄までの集会があります。それは、宣教師一人ではできない、人間ではできないのです。どこでも主が開きました。

大切なことは、organismとorganizationの土台の区別がはっきりと分かる、ということです。この二つは正反対のものです。大切なポイントです。いのちの問題です。

「一緒に日本へ行きなさい」。Mr.スパークスは本当に正しかったのです。

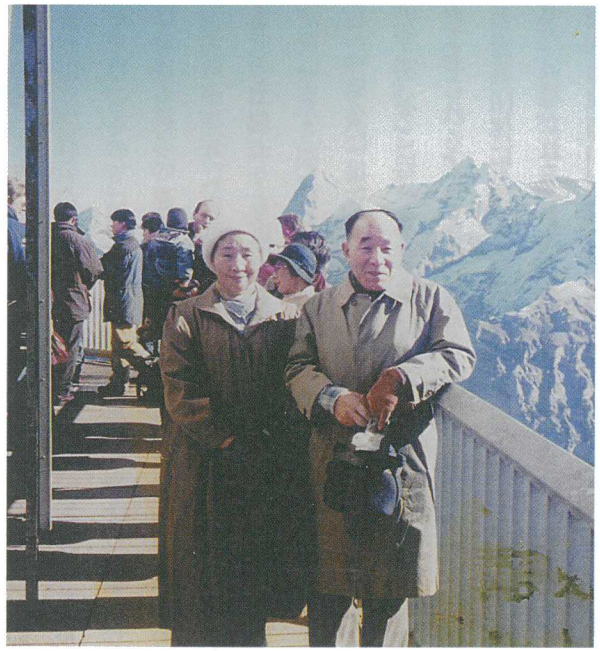
イエス様に信頼することは、すべてのすべてです。



ミンヘン・ベック姉妹の証し

きょう、救いがこの家に来ました 人の子は、失われた人を捜して 救うために来たのです

高橋　敬治



妻の郁子さんと

このようにして、私のような者がお証しする機会を与えてくださいまして、心から感謝いたします。まあ、何を話すのか分からないんですけども、神様がすべてを話させてくださるということを聖書を通して知りました。あなたがたは何を語るか、何を話そうかなどと心配するには及びません。わたしがそれを教えようと聖書の中に書かれてあります。本当にこの福音に接したということは、ありがたいことであります。

私は、生まれは一九三〇年（昭和五年）、山形県の酒田市であります。それは、戦時中でありました。私は、軍国主義の時代に育ち教育を受けました。本当に、いまにして思えば、空しい生き方でした。聖書のみことばをお読みします。

ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。

キリストは、世の始まる前から知られていましたが、この終わりの時に、あなたがたのために、現われてくださいました。（1ペテロ　1・18〜20）

港町である酒田では、各町々に神社があり、お祭りがあって、熱心に仕えておりました。そんななかにあって私は、五十何年かの間、聖書のことはまったく知りませんでした。でも話は聞いておりました。聖書の中に人を変えるものがあると。世界に影響力を与えた本であることは知っておりましたけれど、実際に聖書を手にとったことはありません。キリスト教の本だろうと思っておりました。

私は、兄と姉と妹と四人兄妹の次男として育ちました。生まれ故郷の酒田は、日本海に面した最上川の河口の港町でありまして、朝な夕なに私は庄内平野のそばに立つ鳥海山という雄大な山を見ながら育ちました。

愚かな無知の時代を過ごしたものですから、神様に逆らい自分本位の生き方をしておりました。家内が家に嫁いでからのことも、やはりそうでした。それぞれ自分の言い分を正しいと主張するので、衝突もしました。まあ、いまにして思えば、迫害したということになるのでしょう。本当に慚愧（ざんき）に絶えません。聖書のことばを知らなかった私の暗い人生でした。

そういうときに、一九七六年十月二十九日、酒田大火がありました。そのときは夕食時でした。私と家内と子ども三人を連れて、車で両親の住んでいる別荘のところに避難しました。何ひとつ持たないで、食物だけ持って逃げました。

私が求めるようになったのは、この火事がきっかけでした。酒田という十万都市の中心部の映画館から出火して、風が強いところですから、一気に千百軒ほ

ど焼けました。それらを通して、ああ、形のある物は無くなるんだなあ、移り変わるんだなあと、思いました。結局、大したものは何もない、ということが分かりました。物によって幸せは得られないということが分かりました。家（うち）には、物がいっぱいありました。あればあるほど重荷になります。逃げるときは、ただひとつ、自分の家族だけです。必要なものだけです。

この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。（マタイ　24・35）

後になって、聖書を通して、イエス様だけが永遠であること、イエス様だけが福音を通してすべての人にいのちそのものを与えてくださるお方であることを知りました。信じました。聖書のことばを真実のものとして受けとめて、救い主なるイエス様を信じることが最も大切なことであると痛感しております。

酒田大火からしばらくして、伝道者がうちの貸し家に来て、「ここの空いてるところでキリストの集会をやりたい。・・集会といっても集まるのは二十～三十人くらいですが、貸してくれないか」ということでした。「どこに行っても断わられた」とも言いました。私は、聖書のことを知りたいと思っておりましたので、貸しました。喜んで貸しました。そして、すぐに私にも教えてくださいと言って、聖書のお話しを聞きました。一九八二年二月五日からです。一週間に二回か三回ですけれども、毎回、聞きにいきました。そして、福音が私にも伝えられたのです。

集会所を借りたクリスチャンの方は、東京の方から来られ、電電公社に勤めている方でした。で、そのときに私は初めてキリストの福音に触れました。最初のころは、聖書もありませんでしたが、私に買ってくださいました。そして、その聖書のところを読んでくれましたけれども、よく分かりませんでした。ですが、一～二年くらい、私は聖書のお話しを聞きました。

家内は、求めておったようで、早く信仰の告白をしました。私は、「いい話だなあ」という程度でした。

そのうち、イエス様の福音がどんなに素晴らしいものであるかを、聖書を通して教えられ、そして、信仰をいただきました。いま私たちがここにあるのは、そのときに信仰の目が開かれたことによるのです。

その後、三人の息子たちは大学入学を機会に上京していきました。それから三年くらいして、生まれ故郷の酒田から聖書一冊を持って家内と二人で東京に出てきました。東京に知り合いがなかったものですから、職業安定所に行って、すぐ住むところと仕事を探してもらってきました。市役所で六か月の出稼ぎ手帳を出してもらって、最初の職場の横浜に来ました。何にも不安はありませんでした。喜んで、聖書のみことばを、イエス様のことを、もっと知りたいという気持ちで来ました。それから次々と仕事が与えられ、六か月の期限が三十年以上になり、結局今日まで帰らないでいます。私が決めてきたからというわけでもないし、何もだれの支援も受けたわけでもありません。バック（後ろだて）がいたわけでもありません。でも次々と神様が導いてくださったのです。

二〇二一年十一月にロサンゼルスでの喜びの集いに参加しました。私と家内と、それから長男益巳（ますみ）と、三人で一緒に同行させていただきました。本当に感謝でした。いま思うとき、神様のお許しがなければ何一つ動かない、ならないということがよく分かりました。

長男は、八丁堀の家庭集会などで何度もお話しを聞かせていただいていました。長男は、腰を痛めて長く座っていることができないということが前にあったものですから、不安がっておりましたけれども、兄弟たちからも祈っていただきました。「みんな祈ってく

れているのだから心配ないから」ということで、一緒にロサンゼルスに行きました。向こうに着いてからは、何も差し障（さわ）りはありませんでした。すべて守られました。神様は、目には見えないけれども、私たちをいつも見守っていてくださる、願いを聞いてくださるお方だ、ということを実感しました。兄弟たちの祈りに支えられましたことを感謝しております。

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。（1テモテ　2・4）

私もそのように望んでおります。うちの子どもだけではありません。すべての人がイエス様を信じて救われ、永遠のいのちをもつ者となる、これが神様の約束であり願いです。私もそのように願っております。

ロサンゼルスでの喜びの集いを通して、何回か兄弟たちが証しをされました。また、みことばを取り次がれました。この世で一番正確な、いつも変わらないものは、この救いのことばです。宗教ではありません。宗教は数多くあります。けれども、私たちはイエス様のいのちを受けています。イエス様がいなかったら、世の中は暗闇です。しかし、イエス様が私たちとともにいてくださるということを聖書を通して教えられており、また信じております。こんな喜びを与えてくださいました神様に感謝しております。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ　3・16）

ヨハネ3章16節のこのみことばをかつて聞いたとき、初めて「ああ、私の罪のためにイエス様が十字架で死んでくださったんだなあ、ということが実感として感じられたことを覚えています。山上の垂訓は、良い話だなあという程度しか受けとめませんでしたけれども、イエス様の十字架を通して、また復活された主イエス様が私にそのいのちを与えてくださったことを知りました。「このイエス・キリストはすべての人の主です。」（使徒　10・36）とあります。

主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます。（使徒　16・31）

長男の他、次男／伸幸（のぶゆき）、三男／泰三（たいぞう）、そして次男の妻／順子（じゅんこ）、孫の幸輝（こうき）、成真（なるま）は、まだ救われておりませんが、神様はみことばを通して、主イエス様を信じなさい、そうすればあなたの家族も救われる、と約束してくださっています。しっかりした信仰に立ち、主イエス様に信頼して、これからの歩みを続けて行きたい、と思っております。みなさまからもお祈りしていただければ、たいへんありがたいと思います。

私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。（ローマ　1・16）

高橋敬治（たかはし　けいじ）
酒田での家業は金網工業、上京後は東京近鉄ビルサービス（株）、東建商事（株）勤務、七十歳で停年退職、現在八十六歳
妻／郁子（いくこ）
長男／益巳（ますみ）不動産管理士
次男／伸幸（のぶゆき）会社員（医療法人）、妻／順子（じゅんこ）、孫長男／幸輝（こうき）大学二年生、孫次男／成真（なるま）高校三年生
三男／泰三（たいぞう）会社員（NEC）

神は唯一です

高橋　郁子



夫の敬治さんと

私は、二〇一五年の二月に末期肺癌の診断を受けました。ちょっと声もよく出ないんですけれども、それでも、私はもうこの世では死んでしまっているので、癌と言われても別にどうということはありませんでした。

私は、一九三五年十月に山形県の小さな町（現在は庄内町）、その当時は余目（あまるめ）町というところで生まれました。小さな地主の娘として、六人兄弟姉妹の三女として生まれました。家族は二十四人の大家族で育ちました。やがて第二次世界大戦が始まりまして、学校の授業はよく覚えていないほど、忙（いそが）しい慌（あわただ）しい学校生活でした。都会からは疎開の学童が来ましたし、午前中は授業、午後はいなご採りや稲あげなどもしていました。

しかし、小学校の三年生のとき（昭和二十年八月十五日）に敗戦になりまして、なんかほっとした感じで新しい時代に入りました。教育も戦後教育に変わり、授業も一変しました。教科書はすべて変わりましたし、歌も新時代のものに、漢字も昔の漢字とは違う当用漢字に変えらるという、そんな学生時代でした。

ある日、県立高校の先輩で、私が尊敬していた方が実家の兄嫁に来てくれることになりました。立派な兄嫁でしたので、自分も何かしなくてはと思い、私は、その当時ドレスメーカー女学院に通っていましたが、庄内に初めて本格的なデパートができるというので、そこに入社しました。朝から夕方まではデパートガール、夜は鶴岡市の夜間学校に通い、そこで素晴らしい言葉を教えていただきました。それは、いまにして思えば聖書の第1コリント13章のみことばでした。「愛は寛容であり、愛は親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。」（1コリント　13・4）でした。なんて素晴らしい言葉だろうと感動しました。この後には「（愛は）・・すべてを信じ、すべてを期待し、すべてを耐え忍びます。愛は決して絶えることがありません。」（1コリント　13・7～8）という言葉が続いていました。そのときは神の言葉とは知らずに聞いておりましたけれども、いまクリスチャンになって聖書のみことばであることを知り、本当に感謝しています。

勤めていたとき、突然、主人との見合いの話がありました。主人には家族が多かったので、そういうところは務まらないと思いまして、何度もお断りしたんですけれど、首に縄をつけてももらいかねないという強引な話で、私もびっくりしました。見ただけではどんな人か分からなかったのですが、行かないと後で後悔するといけないからと言われて、「そうかな」と思って、親の言うことだからと嫁ぎました。

でもそのころの私は、自分は人間ができていないということが分かっていなくて、自分自身は普通の者だと思っていました。嫁いでからも、自分は至らない者だとは思わないで、主人を自己中心で高慢な者だと思っていまして、いろいろ試練がありました。私は、毎

日、神に祈りました。「神様、私が神様に対して何か罪を犯したから、こういう苦しい試練に会うのでしょうか。それとも、夫の方が悪いのでしょうか。本当に神様、私に真実を教えてください。私を助けてください。人は何のために、この世に生まれてきたのでしょうか。また、いかにして生きるべきでしょうか」と、祈っていました。

男の子が三人生まれて、そうしているうちにみな成長し、長男は大学入学で上京しました。次男が大学受験で一九八二年二月に上京するときに、突然、二人の方が来て、主人の持っていた空家を「キリスト集会所に貸してください」と言われました。私は、借りにきた方を見ているだけですごく幸せな気分になって、喜んでいました。主人は主人で、聖書の話を聞きたいと思っていたそうです。それで、二人とも、それは良いことだと思って、そこに集会所が起こされました。

初めに、神が天と地を創造した。（創世記　1・1）

神様とは、天と地を創造したのはまことの神様だったのだと初めて分かりました。それからの毎日は私の天国でした。しかし、まだその当時は疑問もいっぱいありました。たとえば、「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。」（マタイ 5・3）と聖書に書いてありますけど、なんで貧しいのが幸いなのか、分かりませんでした。いろいろ質問しました。

その当時、伝道者の方と、聖書のことを教えてくださる方がいまして、その方がすべて最初は「そうですか、そうですか」と聞いていましたけれど、次の集会のときには、私が質問したすべての答えを聖書を通して答えてくださいました。それで、もう私は聖書について質問することがなくなりました。「私の疑問はすべて聖書に書いてあるんだなあ」と思いまして、それで私は信仰を告白しました。わずか二～三

か月の間に、信仰告白しました。本当に聖書のみことばがまったくそのとおりだと心から感激しましたので、私は、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くし、いのちの限りを尽くして、神である主を、イエス様を第一に、信じ、愛し、隣り人を自分自身のように愛します」と信仰の告白をしました。それができるかどうか私にも分かりませんけど、イエス様を信じてなかったことが自分の罪であったのだなと、そのときはっきり分かったのです。後になって主人から「おまえは何の罪を犯したのだ」とよく聞かれましたけれども、自分は具体的にどんな罪を犯したかは分からなかったのですけど、結局、イエス様を信じなかったために傲慢（ごうまん）になって、すべてのことが罪として現れたんだなあと分かりまして、「イエス・キリストを信じなかったことが私の罪です」と答えました。

本当に、愛するイエス様がいのちを懸（か）けて十字架にかかって、こんな罪の深い傲慢な私の罪の身代わりとなって死んでくださるほどに、神は愛です。完全な神。天地万物の創造者であり、統べ治めている神が私をいのちを懸けて愛してくださったんだと思ったとき、本当に心から自分の傲慢、罪を心から悔い改めて神を信じ、イエス様を信じる信仰だけが人生の唯一の目的となりました。ですから最初に申しあげたように、末期癌と言われたときも、肉体はもともと地のちりで造られているのでいらないものだったんだ、肉体はそれで罪のゆえに滅びるんだな、と思いました。いのちを懸けて、身代わりになって完全に贖いを成し遂げてくださり、三日目によみがえられ、いまは父なる神の右の座に着座され、永遠の花嫁として迎えられた方に、イエス様を信ずる信仰によってただ感謝して、主にお仕えして生きるのみです。本当に罪深い私ですが、愛する主の兄弟姉妹としてよろしくお願い申しあげます。

主は私の羊飼い。私は、乏しいことがありません。
（詩篇　23・1）

まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。
（詩篇　23・6）

感謝！

主イエスの恵みがすべての者とともにあるように。アーメン。
（黙示録　22・21）

高橋郁子
一九三五年、山形県余目町（現在の庄内町）で、父／梅木栄助、母／かち江の六人兄弟姉妹の三女として生まれる。
主人／高橋敬治（八十六歳）
長男／益巳（五十五歳）不動産管理士
次男／伸幸（五十二歳）会社員（医療法人）、妻　順子、孫／幸輝（大学二年）、成真（高校三年）
三男／泰三（四十九歳）会社員（NEC）

暗やみには光を

渡邊　周作



妻の真希さんと。ベックさんと一緒に

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。――光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。――そのためには、主に喜ばれることが何であるかを見分けなさい。実を結ばない暗やみのわざに仲間入りしないで、むしろ、それを明るみに出しなさい。なぜなら、彼らがひそかに行なっていることは、口にするのも恥ずかしいことだからです。けれども、明るみに引き出されるものは、みな、光によって明らかにされます。明らかにされたものはみな、光だからです。
それで、こう言われています。「眠っている人よ。目をさませ。死者の中から起き上がれ。そうすれば、キリストが、あなたを照らされる。」　（エペソ　5・8～14）

私は一九七五年、東京都中野区に生まれました。その後、幼稚園入園前に神戸に移り住みました。当時、両親は夫婦で小さな貿易会社を経営していまし

してくださることを、私たちは知っています。

（ローマ　8・28）

このみことばにある、主がすべてを益としてくださる事実を三十年近くたった後で、体験的に知ることとなりました。しかし、当時は両親の価値観がまったく変わり、喜びに満ちた生活に変わったのは良いことだと思いましたが、信仰を持つと色々なことが制限されるに違いないと考え、キリスト集会と信仰からは距離を置きました。

その後、両親が経営する会社の業績が好転し、経済的に余裕ができて、私はアメリカで高校から大学卒業まで過ごしました。親元を離れることで自由が増し、自分の楽しみ、自分の利益を追求して、自分以外に対して思いやりどころか、あまり関心もない態度でした。しかし、心の奥底に大きな空洞があることに気付くこともありました。そんなときは両親のたが、家庭も会社も経済的に厳しい状況にあったことを鮮明に覚えています。両親の会話は家の中でも仕事の話が多く、「○○銀行から××銀行に送金して、今日は何とか間に合った」というような会話を耳にするようになり、子供ながらに経済的なことをいつも心配するようになりました。

しばらくして、両親が神戸のキリスト集会に集い始め、イエス様を信じる者へと変えられました。その後、会社の経営はさらに悪化しましたが、両親は「これも主が起されていることだから感謝」と言って、落ち込むどころかますます喜び始めました。子供ながらに、単に何でも前向きに考えるポジティブ思考になったのではないかと考えました。しかし、そうではなく次の聖書のみことばに裏付けられていたのでした。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益と

信仰生活を見て、前向きな考え方だけを参考に取り入れ、何でも前向きに捉（とら）えれば良いのだと考えました。そして単なるポジティブシンカー（楽観主義者）となっていました。

アメリカの大学を卒業後、東京で商社に就職し、しばらくしてロサンゼルスへ赴任しました。そのロサンゼルスで妻の真希と出会いました。社会人になってからも、仕事を要領良くやって、後は一度きりの人生をいかに謳歌（おうか）するかということ、自分のことだけを考えて生活していました。真希と交際を始めて四年が経ち、いよいよ結婚という話になったときに、自分の女性関係、不誠実さが明らかになりました。また、時期を同じくして、母が末期ガンであるということがわかりました。そのとき、自分の虚（むな）しい生き方、自分のことしか考えない性質、また母親の病気に対してまったく無力であるという事実に直面し、自分自身と自分の人生に絶望しました。

私は心の中で言った。「さあ、快楽を味わってみるがよい。楽しんでみるがよい。」しかし、これもまた、なんとむなしいことか。笑いか。ばからしいことだ。快楽か。それがいったい何になろう。私は心の中で、私の心は知恵によって導かれているが、からだはぶどう酒で元気づけようと考えた。人の子が短い一生の間、天の下でする事について、何が良いかを見るまでは、愚かさを身につけていようと考えた。

私は、私の目の欲するものは何でも拒まず、心のおもむくままに、あらゆる楽しみをした。実に私の心はどんな労苦をも喜んだ。これが、私のすべての労苦による私の受ける分であった。しかし、私が手がけたあらゆる事業と、そのために私が骨折った労苦とを振り返ってみると、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。日の下には何一つ益になるものはない。

私は見た。光がやみにまさっているように、知恵は愚かさにまさっていることを。知恵ある者は、その頭に目